

『放生津八幡宮と祭り』

「みんながけんこうで、祭りがことしもできますように。」

令和四年の初もうで、ぼくは、新湊の放生津八幡宮に行き、目をとじて心の中で言いました。放生津八幡宮は、ぼくが楽しみにしている新湊曳山祭りの神社として有名です。ここに来ると、祭りの時のわくわくする楽しい気持ちと合わせて、せながピンと真っすぐのびる気持ちになります。

コロナの中で、ぼくたちの生活はともきゅうくつになりました。旅行にも行けないし、マスクもずっとつけたままです。学校の行事も開ききれないものもあって、物足りない感じがします。ぼくがとくにショックだったのは、おとし、新湊曳山祭りが中止になったことです。ぼくは、楽しみをとられたような気持ちになって、悲しくなって力が出なかったり、家族におこったりと、残念な気持ちになりました。この時、ぼくは、

「せめて、曳山が動いているだけでもいい。」

と思いました。曳山が行われない時間の中で、ぼくにとって新湊曳山祭りはなくてはならない大切なものだとわかりました。

去年の秋、新湊曳山祭りは二年ぶりに開催されました。ぼくは、朝から新湊に出かけました。祭りを見ることができると思うと、うれしくてたまりませんでした。放生津八幡宮の前では、曳山と曳き子の人たちに宮司さんがおほらいをしていました。町の絵がらの入ったそろいのマスクを着けて、目をとじておほらいを受ける曳き子の人たちの真けんな様子はとてもかっこよかったです。その後、

「イヤサー。イヤサー。」

というかけ声をひびかせながら、曳山は町に向かって動き出して行きました。町の人たちも、そして八幡宮の神様も、曳山がもどってきて、よろこんでいるようでした。

今年も祭りが開きいされるには、みんながけんこうでなければなりません。ぼくは、しっかりとマスクを着けたり、手をあらったりすることを今年もわすれずにしたいです。そして、神様にみんながけんこうにすごせるようにいのりつづけます。心の中で、

「イヤサー。イヤサー。」

とかけ声をかけながら、神様の力をかりて、コロナを追いほらいたいです。